

特別講演

木の力を輝かせる

小野寺 邦 夫

Kunio Onodera

丸平木材(株) 代表取締役

プロフィール



1966年 宮城県(旧)志津川町生まれ

1991年 成蹊大学法学部法律学科卒業

1992年 丸平木材(株)入社

2009年 同社代表取締役社長就任

1. 近年の日本の植林と木材状況

日本の本格的な植林、特に針葉樹の計画的植林に関しては、明治中期にドイツの林学が入って来たのが始まりである。その後、日本は大きな戦争に突入していくが、戦中も植林は実行され、戦後は拡大造林のもと、山は地域潜在植生の広葉樹から、杉・檜・松といった針葉樹への林種転換が進められていった。その後の高度経済成長の中、旺盛な木材需要が起り、山の木はどんどん伐採されたが、植林は確実に実行されていった。植えれば将来必ず儲かると信じられ、奥山にもどんどん植林されていった。ただ、やがて適木が少なくなり、日本の山は育林の時代へと入っていった。政府は木材の輸入を促進する為、輸入を自由化し、関税も無関税に近い水準にした。その中で、外材の高規格化が進み、建築工法も変化していき、効率化が図られるようになっていった。こうして、国産材は、次第に外材の安さ・高規格・安定供給力に押され、使用比率が減少していった。

翻って、現在の森林の状況を見てみる。世界の森林率(国土に占める森林の割合)は現在30%程度である。それに対して、日本の森林率は67%。なんと日本の森林率は世界第3位なのである。それに対して、森林利用率(木材の伐採量を成長量で割った値)を見てみると、フィンランド、スウェーデンといった森林国は0.7の値に対して、日本は0.4。つまり、他の森林国の半分しか日本は国産材を使っていないのである。日本はこんなに森林が豊かなのに、自給率は20数%程度しかないのである。これには、他の森林国に比べ高い伐り出しコストの課題を始め、多面的な課題が挙げられる。

2. 森林の放置からの国土の崩壊

しかしながら、このまま日本が山を放置していれば、間違いなく山は死んでいく。現在の森林は、過密植林された後、手入れされず放置されたままの森林がとて多く、太陽の光が地表に届かず鬱蒼として、その中

で木々は針金の様にしか育たず、死の叫び声をあげている状況なのである。今こそ、山を生きかしていかなければ、自然・恵みの原点である山は荒廃し、国土が崩壊してしまうことが危惧される。政府も森林・林業再生プラン等によって木材自給率を引き上げる方針を示している。ただし、量的に使えば、山は生き生きと再生するのだろうか。勿論、量も使っていかねばならない。しかし、根本的な課題は、現在の森林経営は、経済的に自立できる状況にはないという事である。

3. 日本の林業の真の価値経営

これを解決するには、日本の木そのものの価値を上げてやる事が必要と思う。日本の森林は、人工林の90%以上が杉・檜・松であり、特に杉が圧倒的多い状況にある。この杉の付加価値、杉だからこその価値を引き出していく事が大切な事だと思うのである。杉には多くの力が宿っている。例えば、空気中の危険な物質を取り除く優れた空気清浄機能、一年の中で変化の大きい湿度をコントロールしてくれる調湿機能、そして人の健康にとって有益な物質を与えてくれる恩恵物質放出機能等々が挙げられる。

先人達はそれをよく理解していたが、経験値だけだったので、近代の我々は科学的ではないと重きを置いてこなかった木の力が、今漸く少しずつ、科学的に解明されてきている。

杉の学名は、「Cryptomeria Japonica」、和訳すると「隠された日本の財産」という意味である。杉の木の中には、我々が未だ知らない多くの可能性があるものと予想されるのである。ただし、この木の力は、木が活着しているからこそ発揮されるのである。つまり加工過程の際、木の命を繋ぐ加工が必須なのである。この「活着している」という定義は、生物学的定義とは違う。木は伐採され、製品となってから第二の人生を生きる。何をもって活着していると定義するかは、様々な意見があるだろうが、「木の細胞が壊れていないこと。酵素が活着していること。そして豊かな精油成分を失っていないこと。」これこそが、木の命の要だと私は思う。

そして、この要素があつてこそ、優れた空気清浄機能、調湿機能、恩恵物質放出機能を発揮してくれる。

この、木の命を繋ぐ加工過程の中で、最も大切なのが、乾燥の温度である。木は元々、潤沢な水その体の中に蓄えている。杉の木はとりわけ水を好む樹種である。しかしながら、この体内の水を一定程度抜かなければ、建築等に使用した後、反り・曲り・縮み等の問題が発生する。この為、昔は長い月日をかけて天然乾燥させていたが、今は暮らしのスピード化の中で、その長い時間を確保することは容易ではなくなって来た。また、建築の気密性の向上が格段に求められる様になり、そして室内湿度環境がドライになった中で、木を人工的に機械乾燥することで、しっかりとした乾

燥材の提供を求められることが一般的になって来たのだが、この時の乾燥温度が、木の命に大きく影響するのである。その温度は50度が限界点と言われている。

自然の中で、50度を超す環境で生育している木がないことからこの事は証明できよう。

今回、東日本大震災で心から感じたのは、人間の文明がどんなに進化しても、自然の猛威の前では無力であるということである。しかしまた、その自然は大きな恵みも与えてくれる。それらはまさに表裏一体なのだと思う。その自然に畏敬の念を持ち、謙虚になること。木が本来持っている可能性を真っ直ぐに活かし、木の力を輝かせること。それこそが真の豊かさと最も大きな付加価値の源ではないだろうか。